

その夜、ミルデインは小さな町で酒場を探して彷徨っていた。店のアテがある訳ではなかったが、どの町でも酒場は似た様な場所にあつたし、またわずかな明かりを頼りに葡萄の看板が下がっている建物を探していれば、自ずと酒場に辿り着く。

そう言えば、彼もよく上を見ながら歩いてきたものだった——そんな事を思い出したミルデインが、小さく笑みを浮かべたその時。彼の目に目当ての看板が映った。ミルデインは、檜の木で出来た飾り気の無い扉をぐいと押し開ける。すると、途端に中から酒場独特の賑わいが聞こえてきた。

活気のある酒場の様子に、ミルデインは淡い笑みを漏らした。男は楽しい時も、悲しい時も……さらにいえば、何も無いときも。必ず酒を飲む生き物だ。だが、それも平時であつてこそ。今だ戦争が続いているとはいへ、酒場がこのように活気に満ち溢れているという事実は、この町の治安が維持されていることを示していた。そして、同時に解放軍の進攻も受け入れられているという事だった。

ミルデインは酒場の中に足を運ぶと、ぐるりと辺りを見回した。そして、運よく酒場の真ん中辺りに空いた丸テーブルを見つけると、洗練された所作で座席につく。戦闘用の甲冑を解いた軽装とは言え、彼の目振る舞いから、彼が「その

辺の傭兵崩れ」とは違うことは明らかだった。一瞬、場違いな闖入者に酒場の空気が冷える。しかし、ミルデインが店主に雑穀酒を二つ頼むと、辺りの空気は元に戻った。身分が高い、お偉方ならきつと高級な葡萄酒を頼むに違いないと思つていた周りの客の予想を裏切り、ミルデインが安い酒を頼んだからだ。この男は、この酒場がどのような場所であるか理解している……異分子でない事が分かると、周りの客の興味が急激にミルデインから失せていったのだ。

周りが落ちついたのと時を同じくしたように、ミルデインのもとに雑穀酒が運ばれてきた。ミルデインは一つ自分の手元に置き、もう一つは自分の反対側の空いた席に置く。そして、無言のまま自分の手元に置いたカップを手にとると、軽くカップを上げ乾杯の仕草を見せた。その様子から、ミルデインに相手が居ない事に気が付いた若い女が、ミルデインの傍に寄ろうと席を立った。しかし直ぐに店主が若い女の動きを制する。言葉にはしなかったが、空席に置かれている酒の意味を……若い女以外、酒場の誰しもが理解していたのだ。ミルデインは、もう酒を飲み来る事が出来ない誰かの為に、その酒を捧げているのだと言う事を。

ミルデインはカップに入っていた酒を半分ほど飲んだところで、テーブルの上にカップを戻した。そして、誰も座っていない席に視線を向ける。

「……やはり、複雑な味がしますね。複雑といえば聞こえがいいですけど、まあ、雑なえぐみが先に立って、酒の旨みを感じるには程遠い」

ミルディンは周りに聞こえない程度の小声で、雑穀酒の感想を呟いた。表情一つ変えずにそんなことを呟いているものだから、周りの客はミルディンがそんな悪態をついていることなど気が付く様子はない。

ミルディンは再度カップを手にとると、酒を口元に運ぶ動きをしつつ周りを見回した。既に随分と出来上がった客が、口泡を吹きながらヴァレリアの未来について大演説を行っている。きつとこれから、彼の演説に反論をする酔っ払いが現れて口論となり、殴り合いの喧嘩が始まるのだ。そして、その喧嘩を仲裁する人間が現れて……さらに泥沼の喧嘩になるのがお決まりのパターン。そんな酒場の様子を、ミルディンは何度も、酒場の端の席で見してきた。……今までは。

そう、彼はいつも酒場行けば、喧騒の端で酒を飲むことを主義としていた。酒場の端で、目立たぬように葡萄酒を飲みながら、喧騒の行く末を見守る。酒場の女たちが寄ってきて、淡い笑みを浮かべてやり過ごし、ただ静かに酒を飲む。酒場の真ん中で騒ぐ、彼の友人を見守りながら。

「たまには君の好きなものを、とと思って注文してみました。やっぱ口には合いません。君はいいですね、安物が合う口でも、飲む量が桁外れだったから、結局飲み代は君の方が高かった」

そう言つてミルディンは笑みを浮かべると、再度空席に向かつて視線を向けた。が、その空席に見知った顔が一つ。置いてあるカップの中身をのぞきこんで、雑穀酒なんて私飲めないのにと高らかに宣言した彼女は、ミルディンの横の席

に座り込んだ。そして、木苺酒を一つ、店主に頼む。

「ミルディン、珍しいわね。こんなところに座ってるだなんて。ミルディンのお決まりは、店の端っこの席でしょ？」

「……それは、こっちの台詞です。貴女こそ、夜の酒場に向くだなんて。怪しげな実験をするには、夜が最適な時間ではなかったのですか？デネブ」

デネブと呼ばれた美女は、意味深な表情でミルディンの目を覗き込む。しかし、それは別にミルディンに気がある訳ではなく、周りがどのように自分たちを見ているか、様子を伺って楽しんでいただけだった。店主に窘められてミルディンの傍につくことが出来なかった若い女が、忌々しげにデネブの事を見つめている。それが分かっているこの行い。それは彼女ならではの少し意地の悪い遊び。そんな遊びをいつもどおりに適当に受け流す事にしたミルディンは、ため息混じりにデネブを見つめ返した。

「あら、遊びには付き合ってくれないの？美男美女同士、酒場に映える状況だと思っただけ。……まあ、こっちにだっている用事があるのよ。この酒場に薬用酒を卸しているんだけど、その代金の回収。ちよつとかぼちゃんが足りなくて、お姉さん自ら回収してるの」

「逃げられたんですね。貴女の下での不当かつ過重な労働に耐えかねて……」

「ミルディンってさ、普段は割と無口な癖に口開くとインケンだよ。そのうちインケンジジイって呼ばれちゃうよ？」  
デネブは唇を尖らせて、頬を膨らませる子供じみた表情を

見せた。いい歳の大人がやる行為ではないが、デネブがやる  
と意外と様になる。そんな事実にも、ミルデインは僅かに口の  
端を上げて笑みをもらすと、デネブに対して言葉を返した。  
「大きなお世話です。まだ爺には遠い歳ですし、そこまで生  
き残れるとも思っていない」

「あー木苺酒きた！」

「私の話を聞く気なしですか……全く、貴女って人は」

ミルデインの返答を全く無視して、デネブは店主が運んで  
きた木苺酒を手を取った。そして、空席の前に置いてあった  
カップに、自身のカップを盛大にぶつけた。

「ギルダス、かんばーい☆」

「……」

「ねえ、ミルデイン。この席で飲むなら、騒いでよ。ギルダ  
スはいつもそうだったでしょ。店の真ん中で、すつごく不味  
い雑穀酒をがぶ飲みして。周りのよく知らないオジサマたち  
にも奢ってた」

「そうでしたね。ええ、そうでした。店の真ん中で、安い酒  
を浴びるように飲んでから、馬鹿みたいに騒いでました。仕  
舞いにはそのまま寝たりするもんだから、引きずりながら宿  
舎まで連れて帰った。いつも、支払いは私の立替払いで。だ  
から、私は店の真ん中で一緒に騒ぐ訳にはいかなかった」

「うん。だから馬鹿騒ぎがいいのよ。こういうところでは。  
……そう言えば、かのぷくはどうしたの？連れて来なかった  
の？」

「ああ、カノープスはデニム君のところですよ。デニム君も相  
当ショックを受けていたようだったから」

そう言って端正な顔を僅かにゆがめると、ミルデインは髪  
を掻き揚げた。そしてまるで思い出を掘り起こす為とでも言  
うような仕草で、こめかみに指を当てる。その仕草の所為で、  
デネブはミルデインのこめかみ辺りに傷跡があることに気が  
付いた。普段は前髪の所為で気が付かない位置だが、はつき  
りとした傷跡だ。デネブは、ミルデインにその位置を知らせ  
るように、自身のこめかみ辺りをちよいちよいと指差した。  
「ねえ、ミルデイン、その傷どうしたの。色男が台無しじゃ  
ない」

「ああ、こめかみの傷ですか……もう、随分と古い傷跡です  
よ。あと、デネブ。貴女の指差している場所は、実際の私の  
傷跡とは反対側です」

「もう、本当にミルデインって口開くとインケンだよね！  
せつかく教えてあげたのに！」

「……すみません。ただ、そちらに傷があるのは、ギルダス  
の方だった。そのことを思い出したんですよ」

「え、ギルダスもこんなところに傷あったっけ？髯とマツ  
チョシか記憶にないなあ」

「さりげなく酷い事を言いますね、貴女は。間違はなくあり  
ましたよ。私と反対側に。私の写し身のように、同じような  
傷跡が」

「おーいデニムー！飯でも食いに行くかああ」